

甲府市御岳町の御師住宅についての研究

— 富士講御師住宅・近代和風旅館との比較 —

Keywords

御師住宅 甲府市 金桜神社
復原 御岳信仰 旅館建築

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

社寺には御師と呼ばれる、参詣者を社寺へ案内し、自らの住居を宿所として提供するなどの便宜を図る神職がある。御師が住み、宿所としていた御師住宅は、大人数の講集団を一度に宿泊させ、行事を行うこともあることから、その形態は特異なものとなっている。山梨県甲府市御岳町には金桜神社の御師住宅があり、今年度、山梨県の実施する近代和風調査の対象となった。本研究ではその建築的、歴史的価値を見出すことを目的とする。

1.2 研究方法

- ①甲府市御岳町、金桜神社周辺の御師住宅について、平面図の実測調査を行う。
- ②明治銅版画より住宅を復原し、現状と比較考察する。
- ③富士講御師住宅、身延町温泉旅館と比較を行い金桜神社御師住宅との共通点、相違点を明らかにし、建築の価値を見極める。

2. 実測調査

・金桜神社御師住宅

調査日：2013年09月27日

対象：細田邸、大黒屋

・富士吉田市御師住宅

調査日：2013年10月12日

対象：上文司家、竹谷家（比較考察対象）

・身延町温泉旅館

調査日：2013年10月30, 31日

対象：いさご屋、裕貴屋（比較考察対象）



写真-1 細田邸、大黒屋

3. 御師について

3.1 御師とは

御師とは、ある社寺に所属し、参詣者をその社寺へ誘導して祈祷や宿泊などの便宜をはかった者をいう。その御師が住み参詣者の宿泊する建築を御師住宅という。この地域では金桜神社に属する御師を指す。

研究指導：伊藤洋子 教授



K10030 小澤宣之

3.2 金桜神社の御師

金桜神社は金峰山の山頂の「御像石」を本宮とする、里宮の一つである。山岳信仰の霊場として栄え、南北朝の動乱期には大いに賑わった。しかし江戸時代後期に社僧の権限が弱まったことで衰退していった。その後は金桜神社への参詣者や御岳講の講中団体が御岳町を訪れるようになり、それに合わせて御師は仕事を変更していった。図-1のように、金桜神社へと続く道沿いに御師住宅があり、参詣者が宿泊した。この内の大黒屋、細田邸の主屋と離れの2軒を研究対象とする。

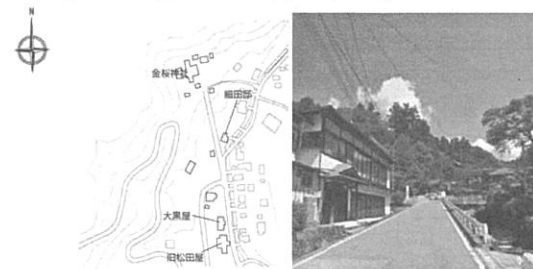


図-1 金桜神社周辺地図、写真

4. 金桜神社の御師住宅

4.1 大黒屋

所在地：甲府市御岳町2472

建設年代：大正期以降

構造形式：寄棟造+入母屋造・トタン葺・木造二階建

金桜神社の御師として大黒屋を営み、講集団を受け入れていた。二階に50畳の大広間があり、そうした講集団を収容する施設として建設された。建物は、入母屋造の東西棟と寄棟造の南北棟が連結している。東西棟は一階を居室、二階を客間とし、増築である南北棟に50畳の大広間を持つ。

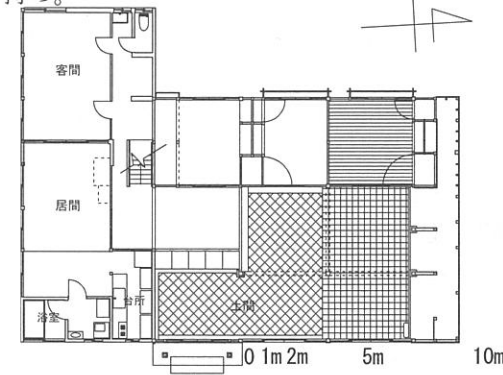


図-2 大黒屋一階平面図

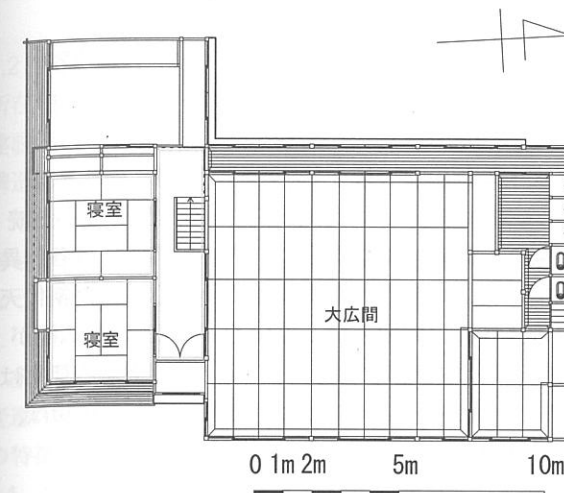


図-3 大黒屋二階平面図

4.2 細田邸

所在地：甲府市御岳町2362

主屋

建設年代：大正10年

構造形式：入母屋造・棧瓦葺、木造二階建

設計：佐野実三他

離れ

建設年代：昭和初期

構造形式：入母屋造・トタン葺、木造二階建

細田邸は金桜神社参道の鳥居脇に立地する住宅で、かつては旅館として経営していた。元々は商店を営み、旅館に改修、当主の祖父・太郎氏により大正10年に建設された。個人の登山客を宿泊させる旅館「御嶽館」を開業した。昭和30年の神社焼失とともに衰退。門前の商売屋から旅館経営を始めたといわれるが、一階の店構は、そうした商売屋の雰囲気をとどめている。離れは旅館業を拡大し宿泊棟として増築されたもので、一階に客間、二階に大広間を持つ。客間には欄間や床の間に個性的な意匠が施されている。細田邸は門前町の変遷を表す一つの要素として扱う。

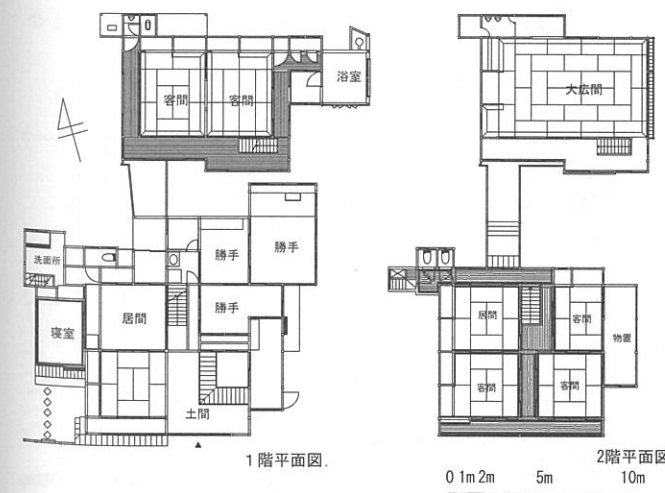


図-4 細田邸平面図

5. 富士講御師住宅

山梨県富士吉田市の富士講御師住宅群と比較を行うために紹介をする。江戸時代に最盛期を迎え、関東・中部をはじめ全国に広がりを見せた富士講は、富士山を霊山とする山岳信仰の講社である。関連する御師住宅が富士吉田市に多く残っている。富士講の御師住宅の特徴を次に挙げる。

- ・「堅家」と「横家」、あるいは「妻入り」と「平入り」といった平面バリエーションと「玄関」～「座敷」～「御神前」に至る室構成。
- ・「タツミチ」「マエノカワ」といった構成要素と敷地割りを含めた全体配置。
- ・「御神前」の存在。

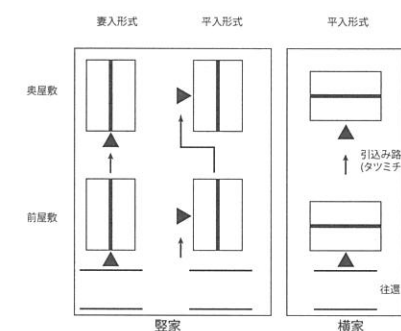


図-5 堅家と横家(模式図)

図-5は堅家と横家の

図である。一般の御師住宅は主屋の妻側を正面に向け、棟筋を往還に対して垂直に配置する堅家・妻入り形式と主屋の平側を正面に向け、棟筋を往還に対して平行に配置する横家・平入り形式の2種類に分けられる。堅家と横家は格式の違いを表しており、堅家は格式が高く、横家は宿泊施設としての商業的傾向が強いものとなっている。

堅家は格式が高く、横家は宿泊施設としての商業的傾向が強いものとなっている。

5.1 竹谷家

所在地：富士吉田市上吉田

建設年代：1915年ごろ

構造形式：入母屋造・木造平屋建

横家・平入りで、西北に御神前があり、主屋からつながる構成となっている。明治末期から大正初期に建て替えられており、以前は堅家・妻入りであった。



写真-2 竹谷家(左) 上文司家(右)

5.2 上文司家

所在地：富士吉田市上吉田4-3-3

建設年代：1864年

構造形式：切妻造・棧瓦葺・木造二階建

先々代まで御師として活動し、その後は民宿として営んでいた。主屋と長屋門が建築当時のものであり、現在の主屋はかつて離れだったものを曳き屋したものである。

Nobuyuki OZAWA

6. 明治銅版画との比較

「甲斐国御岳金桜神社全景」の明治三十九年の銅版画より当時の建物を3D復原し、現在と比較考察を行う。当時の金桜神社は、山岳信仰がすでに衰退し、昭和三十年に火災で焼失してしまう前の姿である。現在の細田邸、大黒屋も共に明治三十九年には建設されていないなどの差があるが、それぞれ同じ敷地に前の建物が建っているのをこれらを比較対象とする。

7. 一般旅館について

山梨県身延町にある2軒の温泉旅館について調査をし、比較を行うために紹介する。身延町は甲州を代表する温泉地で旅館が多数存在する。江戸時代に湯治場となり、久遠寺の門前町の発達の影響により賑わっていた。

近代の旅館建築は、豪華さを主張する傾向にある。銘木や細やかな細工、螺鈿などを多く用いる傾向が昭和初期頃から特に顕著になる。また、木造3、4階建ての建物や大広間を持つ建築が数多く建てられている。全体的な印象は和風を保ちながらも豪華に見せる演出が、客の欲望を満足させ、経営的に社会信用を得ることに役立った。

7.1 いさご屋

所在地：南巨摩郡身延町身延3696

建設年代：1940年

構造形式：入母屋造・桧瓦葺・木造三階建

創業から100年以上の老舗旅館である。久遠寺へと続く細い東谷参道の入り口に建つ。内部は客間には各々異なる図柄の細工が施された欄間や竹を編みこんだ網代天井など近代和風の内観となっている。2階には大広間があり、囲むように廊下が廻っている。創業当時の建物は1940年（昭和15年）火災により焼失。現在の建物は、その後静岡県富士宮市から移築したものである。



写真-3 裕貴屋(左) いさご屋(右)

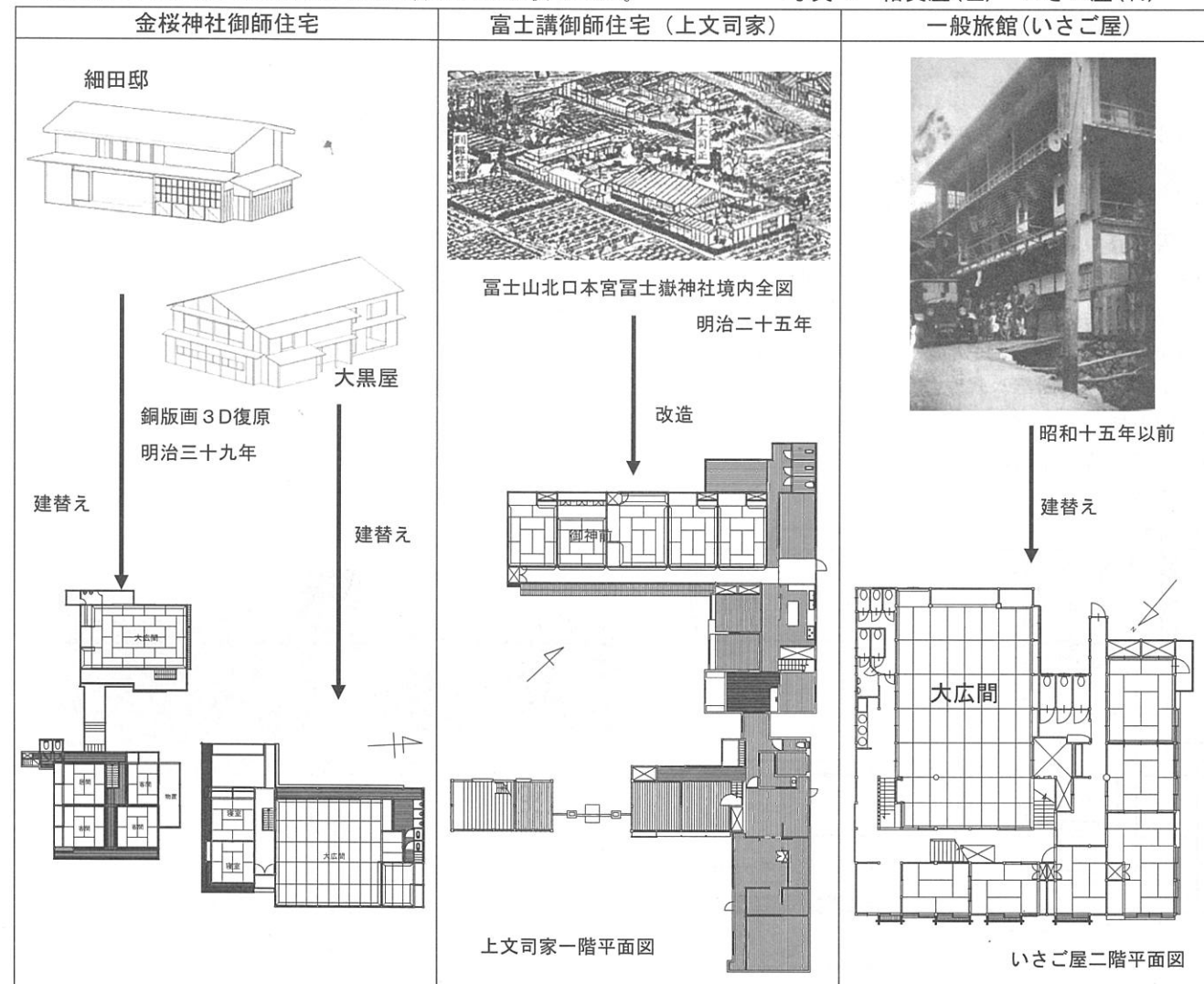


図-6 金桜神社御師住宅、富士講御師住宅、一般旅館の変遷

7.2 裕貴屋

所在地：南巨摩郡身延町下部48

建設年代：1933年

構造形式：入母屋造・桧瓦葺・木造三階建

下部川の溪流に沿って建っており、木造三階建て、車寄せの付いた入り口など、近代和風の外観を持つ旅館となっている。

8. 比較考察

金桜神社御師住宅との比較を行うために、それぞれの変遷の様子を図-6に示す。これを基に金桜神社御師住宅の特徴を見出す。

8.1 大広間についての考察

細田邸、大黒屋に共通して二階に大広間があることが挙げられる。しかし大広間の用途はそれぞれ異なり、細田邸は旅館としての大広間であるが、大黒屋は大勢の御師を一度に宿泊させ、行事を行う御師住宅の「御神前」の役割であるという差がある。

一般の旅館は大広間を持つ建物が多いが、これは豪華さを主張するための一つの要素となっている。

富士講御師住宅には広間はあるが、大きいものではなく、御神前も広間とは別に設けられている。また、これらを二階に持つ建物はほとんどない。

建設年代から、富士講御師住宅建設時にはなかった大広間を作る近代の技術が、金桜神社御師住宅建設時には旅館で用いられるように一般的になり、一度に大勢を宿泊させる必要のある御師住宅という用途とマッチして大黒屋のような大広間を持つ御師住宅が成立したのだと考えられる。

8.2 金桜神社御師住宅の特徴

富士講御師住宅の特徴に金桜神社御師住宅を当てはめると、平面形状は、大黒屋は横家で、細田邸も道との関係が斜めになっているが、横家形式であるとわかる。(図-7) このことから、2軒とも商業的な傾向が反映されていると考えられる。

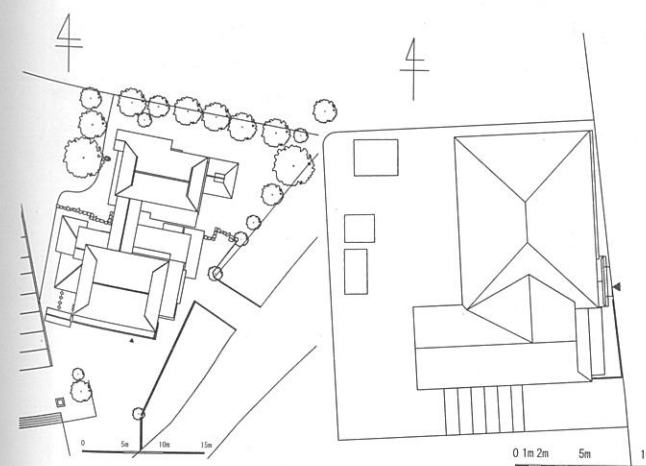


図-7 細田邸、大黒屋配置図

図-6から変遷の様子を見ると、一般旅館のいさご屋は火災により建物を失ったが、外観を前後で比較しても近代和風の要素を維持しており、2階に大広間を持つ建物へと変わっている。富士講御師住宅は富士登山の観光化や交通の整備によって、御師屋敷は観光旅館へと用途を移していった。上文司家は、当時の主屋を失った経緯は不明だが、新しく建てることなく離れを曳き屋したことから、富士講の衰退と共に御師住宅としての屋敷構が必要なくなったと考えられる。その後は民宿として活動しており、登拝客減少と観光化に合わせた用途に変更している。

金桜神社御師住宅は2軒とも建替えたものであるが、経緯が異なっている。金峰山信仰は江戸時代頃から衰退し、修験者は減少したが、金桜神社の祈願参詣者は減らず、御師が布教をはかり、講中団体を宿泊する宿も繁昌した。その中で、細田邸は用途を商店から旅館に変更した。建物は横家の主屋のみであったものが、旅館業拡大のために、離れを増築した。建替え後は、意匠に特徴を持つ欄間や床の間など、近代和風旅館の要素を持つ建物になった。大黒屋は横家の主屋のみだった建物が、2棟が連結した形式に変更されている。昭和中期に講集団を宿泊させた記録があり、そうしたニーズと近代の技術によって大広間という旅館の要素を持つ御師住宅となったと考えられる。

9. 総括

富士講の御師と金桜神社の御師は、どちらも近世の信仰は衰退し、近代の用途へ変貌した。このことから同じような経緯を辿ったように見えるが、金桜神社御師住宅の大黒屋は近代和風の技術や、旅館の要素が顕著に表れており、その後の時代に合わせた独自の形式を持った建築となっている。

参考文献

- 「富士山吉田口御師の住まいと暮らし：外川家住宅学術調査報告書」外川家住宅学術調査会、富士吉田市歴史民俗博物館編集。-- 富士吉田市教育委員会、2008
- 「甲斐国御嶽金桜神社全景」秋谷樞之助 1906
- 「山梨県指定有形文化財旧外川家住宅保存修理工事報告書」富士吉田市教育委員会歴史文化課編集、富士吉田市教育委員会、2010
- 「甲府市史 通史編 第3巻」甲府市史編さん委員会 1990
- 「富士・御嶽と中部霊山」鈴木昭英 1978
- 「甲斐の美術・建造物・城郭」羽中田壮雄先生喜寿記念論文集 刊行会 2002
- 「富士山北口本宮富士嶽神社境内全図」青山豊太郎 1892
- 「近代和風建築」村松貞次郎 近江榮 1988
- 国重清香「富士信仰建築、御師屋敷の近世から近代における変容について -山梨県富士吉田市を中心として-」芝浦工業大学卒業論文 2004